

天ぷらバス ライフカフェ in 南三陸町

日時：平成 23 年 4 月 29・30 日

場所：<本店>南三陸町志津川高校

<支店> 〃 志津川中学校

参加者の感想

支店（30 代女性）

来る前の印象としては現地の方は苦しくて悲しんでいるのかと思ったが、復興祭を自力で企画し、開催するパワーや活力を感じ驚かされた。

車のNo.には鹿児島や姫路もあり、実際接客した方の中には仙台や石巻からお越しのお客様もいらっしやり祭りのエネルギーを感じた。今後の南三陸町の復興に期待を持てた。

コーヒーが楽しみにされるカフェになればいいと思った。

支店（30 代男性 夫）

バザーやフリーマーケットみたいな雰囲気。皆さんに楽しんでいただけたと思う。

今後も参加したい。

本店（30 代女性 妻）

南三陸町の看板の後、町が見えた時はとてもショックでカフェ運営に不安を感じたまま高校に着いた。実際に被災者の方と接してみて、思ったより明るくて帰路についている今は心地よい疲労感を感じている。

「ホッとしたひと時が過ごせた」と言われた事がうれしかった。

本店（30 代女性）

昨日の夜からずっと「実際どうやって呼び込みを行うのか」等不安を抱えていたので最初に被災者の方が来たときは一番うれしかった。

「泣いてもしょうがないし」という方がいて、「そういう思いで頑張っているんだ」と感じた。ただ、同じ質問をしても人によって答えが違う場合があり、情報の共有がなされていないのか、遠慮がちな方への配慮が足りないなど問題も感じた。

支店（20 代女性）

実際始めるまでは不安だったが、おじいちゃんが「コーヒーか。これ飲んで頑張ろうかな」とか、

「いい香りね。一杯ちょうだい」とおばあちゃんからいわれ、こういう臨時カフェにニーズがあったんだと実感した。

支店（30 代女性）

瓦礫をみて不安に思い、被災者の方とどう接していいのかが分からず、ひどいことを言っ

うのではと思ったが、少しの事でも笑ってくれてうれしかった。
人生が変わる経験だと思った。

支店（20代男性）

現地に着くまでは不安でしたが、みなさん前向きで自分の方がすごく勇気付けられた。現地の方がライフカフェを利用している間だけでも今の現状を忘れることができたらいいなと思った。

本店（30代女性）

臨時のカフェというものにニーズがあるのかどうか不安だったが、実際やってみてどうだったかは相手が決める事だが、「全部なくなったのに、毎日感謝」とか「瓦礫をもう二度と見たくない」といっていたおばあちゃんと接して、これからも現地の事を忘れないようにしようと思った。

本店（30代女性）

何をしてあげられるだろう？カフェをどうやって受け入れられるのだろうと注意しながら見ていた。呼び込みしなくても来てくれるのが嬉しかった。地元の人じゃないのに一緒にゆっくりお茶の時間を楽しんで自分の話しをしているのが印象的だった。来週も来るといって「楽しみ」といわれて嬉しかった。子供達との時間が貴重と思ったし、地元の方のお話が聞けてよかった。

本店（30代女性）

現地を見たときには呆然とした。被災者をかかわる際の注意点を思い出し、いつもどおり穏やかな気持ちでいこうと思った。最初は笑顔で「ありがとう」というが、話しているうちに「あの津波が全部流してしまった」と涙ぐむ方や、最初は自分の家の写真を見せ説明しながら「後ろをみてもしょうがない」と明るく話していても昨日体調が悪くなって吐いてしまったりしている話を聞いて、復興祭で元気に前を向いて進んでいる一方で、一日一日噛み締めるように少しずつ歩んでいる人もいるのだと感じた。

今日のことはこれからも忘れないで生きたいと思う。

支店（40代女性）

地元の方から「元気のいいところから買うもんね」と400円分買ってくれた人がいてうれしかった。泥除け24時間と違い、前日大沼さんに泊まってホッとした。移動カフェとしてのニーズはあったと思うので、これからはキャラバンをくんで石巻の自宅にいる被災者向けのカフェがあってもいいと思う。

支店（30代女性）

支店で販売を行っていたが、中学校からは瓦礫の町が見え、被災者の方は現実にそんな辛い環境の中にいるんだと思うと、自分自身とても辛かった。

・・・良く聞こえませんでした。すいません。

支店（20代女性）

現地の心配より、1人で参加する事が心配でしたが、みなさん優しく、とても良かった。

現地の人は後ろばかり見てはられないので、明るくワイワイ楽しくやっていた。

手作りのスイーツは人気があり、すぐ完売した。

瓦礫は衝撃だったが、人の手ではどうにもならないと思うので、これからも参加したいと思った。

本店（30代男性）

今日のこの経験を決して忘れず、外国人の視点から日本の事をもっと学びたいと思った。

1人1人が献身的に責任をもって1日1日過ごしていると感じました。

自分が出来ることは小さい事かもしれないが、それをみなさんと一緒に出来てよかった。

子供と遊ぶことができ、とてもいい経験でした

本店（20代女性）

「前をむいていこう」という所まで気持ちを持ち直した50数日を考えると苦しくなりました。怒りの感情をぶつける人もいて、それはカフェについてではなく、どうしようもない現状や、自分達の町なのに自分達に情報が入らない事、防災アナウンスを担当していた女性職員が津波の被害にあってしまい今だ見つからないのに「防災対策の建物をモニュメントにしよう」と他の市長の発言に対してだった。

「また来週もカフェをやる」と伝えると「ここでなくても帰りには声かけてね。」といわれ、被災者の中には「自分はこの町が好きなので、毎日瓦礫を見てもここにいたい」という方もいた。何回か同じ場所でやった方が被災者の【癒し】にはいいのかなと思った。

本店（40代女性）

朝、町の様子を見た時に、自分の想像を超えていてどうしたらいいかわからなくなった。

カフェで現地の人の話を聞いて、一緒に時間を過ごせたことが自分にとっても良かったと思う。

被災者の方は普段の飲み物はペットボトルが多く、「温かいものが飲めるのはうれしい」と言っていた。

本店（30代女性）

最初はとても心配だったが、テーブルクロスの上に赤い布があってすごくホッとした。「本当にカフェっぽいね」と被災者の方に言われ、とてもいい空間になったと思う。他の炊き出しの場所にも食べる場所が無かったので、良かったと思う。

ただ、お湯がなかなか沸きにくくお待たせしてしまったのが改善点だと思う。

自衛隊に対しての信頼が厚く、とても子供達と仲がよくかった。子供達の事も下の名前で呼んで

いた。現地の方との良い関係を作ることが課題だと思う。

本店（40代男性）

仕事が忙しかったため、体力的にもつかどうかが不安だった。現地で何ができるか？人間は自然の前では無力なだけに、カフェという空間で人とどう向き合えるのかと考えた。被災者の方と話すうちに、落ち着いたらその先に楽しいものがあるような話し、話だけではなく、リアリティのある事がいいのかと思った。

開催場所は継続的に同じ場所で行った方がいいと思った。

本店

臆病で平凡な自分が行って何が出来るのかが心配だった。ただ一緒にいて、うなずいてあげるだけしか出来なかった。こうやってコーヒーの香りをかいで手を振って見送ってもらえる時間を過ごせたのが幸せだったと思える。

本店（30代女性）

ダンボールのイスを喜んでもらえるのか、自分で作れると思ってもらえるかと不安だったが、子供達が喜んでイラストや名前を書いていて、それぞれにカスタマイズしていたのでとてもうれしかった。また、おばあちゃんに話を聞くと、ずっと座っているから立つ時にひざが痛いので、小さくていいから、中に物が入られるようなものがあるとオーダーを受けた。「将来の夢は自衛隊」ではなく「将来の夢はデザイナー」と言われるよいに、これからもっと作りやすいイスを目指して改良したい。

本店店長（20代男性）

町の景色をみて石巻よりも衝撃を受けた。被災者の方から津波の当日の話が聞きました。

「津波が来たときは、赤い煙とその上にスコールがあるのが見え、ゴゴゴッとすごい音が聞こえた。海のほうを見ていると高校から人が来て、そこから早く逃げろと言われて逃げたら津波が来た」との事。炊き出しを勧めわれ断ると「食べる事も復興のひとつ」と言われ、ラーメンを頂いたがとても美味しかった。

支店（50代男性）

厳しい環境におかれている人を見て動揺しない人はいないのですが、避難所に50数日泊まっている方は何を感じているのかと考えた。

避難所でなく、家族と一緒に暮らせるシェルターが必要なのではと感じた。

また、復興祭では、今まで一方的に支援されるのではなく、自分で対価を払って自分の好みの物を買える。対等の関係を結べるというのは復興にあたりとても大切なステップと感じた。このメンバーと参加できて本当に良かったです。